

# 単純作業から個性的活動へ

# 変わる障害者の働き場

## ハム、パン作りや美術制作

## “企業努力”で仕事生む

一般企業への就職が難しい障害者の自立を支援したり、働く場を提供する、授産施設や福祉作業所が変わり始めた。これまで、こうした施設での仕事は、袋詰めや組み立てといった単純作業が中心で、支払われる賃金も安いケースが多かった。それが最近では、業務用食品やパンの製造販売、美術作品の制作など、個性的な活動を試みる施設が自立してきた。施設に仕事を依頼する企業が減ったり、画一的な作業に疑問を持つ保護者が増えつつある中、こうした試みが注目されている。



ニワトリの世話をするセルブ水士会の利用者と職員

高岡市後援の知的障害者授産施設、セルブ水士会(金谷透施設長)は、業務用ハム、ソーセージの製造販売する会社に役員を派遣。同

売、ブルーベリーの栽培、養鶏などを展開。製品のほとんどは都内のデパートやレストランなどに販売、高く評価されている。現在、二十七人が通っており、障害の程度に合わせてさまざまな作業を提供、作業内容に見合った賃金を支払っている。平均賃金は月額約一万五千円だが、新年度は事業を拡大して倍に引き上げる。金谷施設長は「企業から仕事を回してもらわなくても、質の高い製品を作ったり、販路を広げるなど、企業努力すれば、仕事は生み出せる」と話す。太田市では、市と市民が出資して会社を設立し、障害者と健常者が協力してパンを製造販売する計画が進んでいる。今春には会社を立ち上げ、都内などで障害者が働くパン店を展開して

社でノウハウを身につけ、今年十月に店舗をオープンさせる。同市福祉事業課は「市内の福祉作業所などで作られた高崎市上並榎町の工房もその店で販売する予定。パンはその店で販売する中心的地域とのコミュニケーションに役立てることを目指して

と税金を払ってもらう程度度の給料を出せるようにしたい」と意気込む。

一方、昨年六月に設立された高崎市上並榎町の工房西(小柏桂子代表)は、美術活動を障害者の自立や地域とのコミュニケーション

いる。小柏代表は、長男が養護学校を卒業した際、各地の福祉作業所や授産施設を見て回り、そこで行われている単純作業の繰り返しに疑問を持った。

その結果、「障害があっても美術の才能のある人たちに創作の場を提供し、その活動を通して市民との触れ合いやバリアフリー化、障害者の自立を促りたい」と工房を開設。現在は、障害者八人がアロの画家の指導を受けながら美術を学んでいる。小柏代表は「将来は地域の人たちが気軽に足を運び、コーヒーなどを飲むみながら作品を鑑賞できるギャラリーのような場所にしたい」と話している。